

カンボジアの「高校における日本語教育」に関する意識調査 —第二外国語としての導入に向けて—

(東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程 ハン・マカラー)

1. 背景: カンボジアの中等外国語教育は、2004年のカリキュラム改訂で、英語またはフランス語が選択必修科目として位置付けられ、外国語でのコミュニケーション能力を養成することが目的となっている。また、将来後期中等教育において第二外国語として日本語教育を導入することが検討されている。

2. 目的: カンボジア人の高校生(H)と日本語専攻の大学生(高校時代に学習経験がある者(U有)ない者(U無))に日本語学習の動機や、興味や関心に関するアンケート調査を実施し、日本に対する知識および意識を明らかにする。その結果は、カンボジアの高校生の日本語科目のカリキュラムをデザインする際に参考にする。

3. 研究方法 (質問紙調査)

対象者 : 日本語専攻の大学生108名
高校生192名 (図1)

質問内容: 日本・日本語に対する知識やイメージ、学習の目的・ニーズ、学習内容に対する要望、身近に感じる話題等

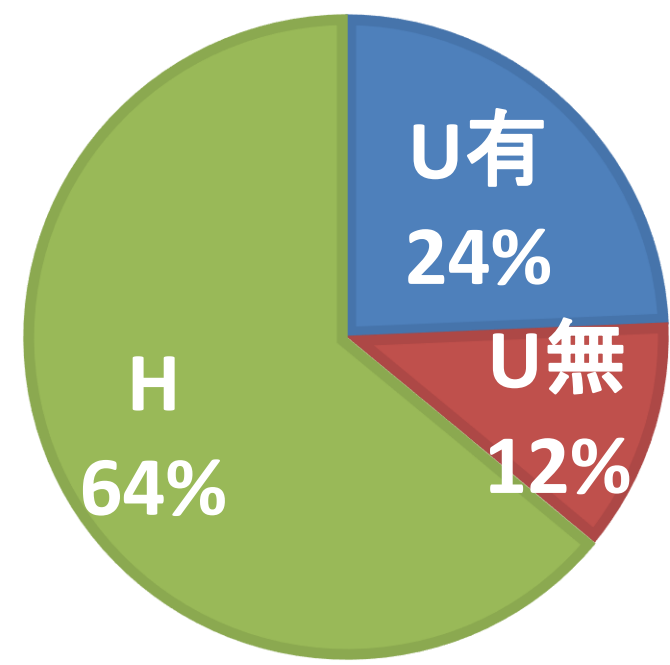


図1: 大学入学前の日本語学習経験

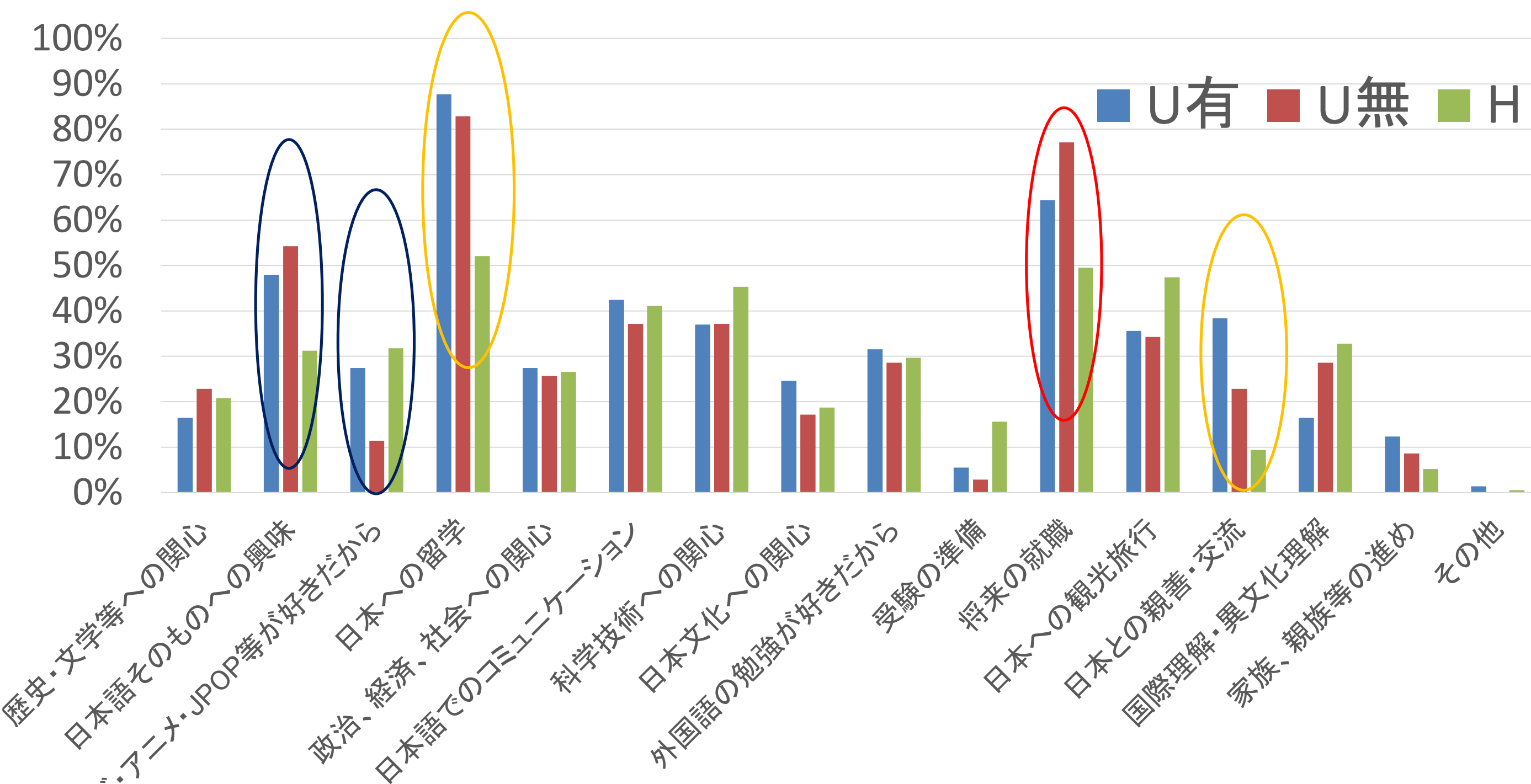


図3: 大学生学生経験有無と高校生の学習目的 (該当するものを5つ選択)

(2) 学習目的: 大学生も高校生も将来の進路として日本での就職と留学を強く望む傾向がある。

U有、U無、Hを比較すると、「日本語」はHが低くマンガ・アニメ等はU無が低い。「日本への留学」、「日本との親善・交流」はHからU無、そしてU有へと徐々に上がり、実際に日本語学習することにより、目的化される項目と考えられる。

表1: 日本語・日本人の印象 (該当するものを全てを選択)

	大学生 (U有+U無)			高校生 (H)	
	順番	項目	%	項目	%
日本人	1	細かい	84.26	礼儀正しい	36.46
	2	約束を厳重に守る	80.56	明るい	30.21
	3	勤勉である	70.37	勤勉である	30.21
	4	明るい	62.96	細かい	29.69
	5	礼儀正しい	61.11	まったくイメージがない	27.08
日本語	1	漢字が難しい	82.41	まったくイメージがない	32.81
	2	助詞が難しい	68.52	話し方がはやい	27.08
	3	話し方がはやい	57.41	発音しにくい	23.96
	4	話があいまい	52.78	話があいまい	23.96
	5	あいづちが多い	36.11	文字が綺麗	19.27

4. 結果と考察

各項目の選択者の比率を算出し、大学生を大学入学以前の学習経験の有無別(U有、U無)に分け、高校生(H)も含めた3者で比較した。

(1) 興味・関心: 3者に共通して高いのは、「料理」「日本製品」であり、ステレオタイプ化されたものである。学習経験にかかわらず、U有もU無も「日本語」「働き方」「科学技術」に強い関心を示している。また、「日本人の性格」「伝統文化」「生活スタイル」は、H→U無→U有と高い傾向が見られ、学習経験によって変化する関心対象だと考えられる。

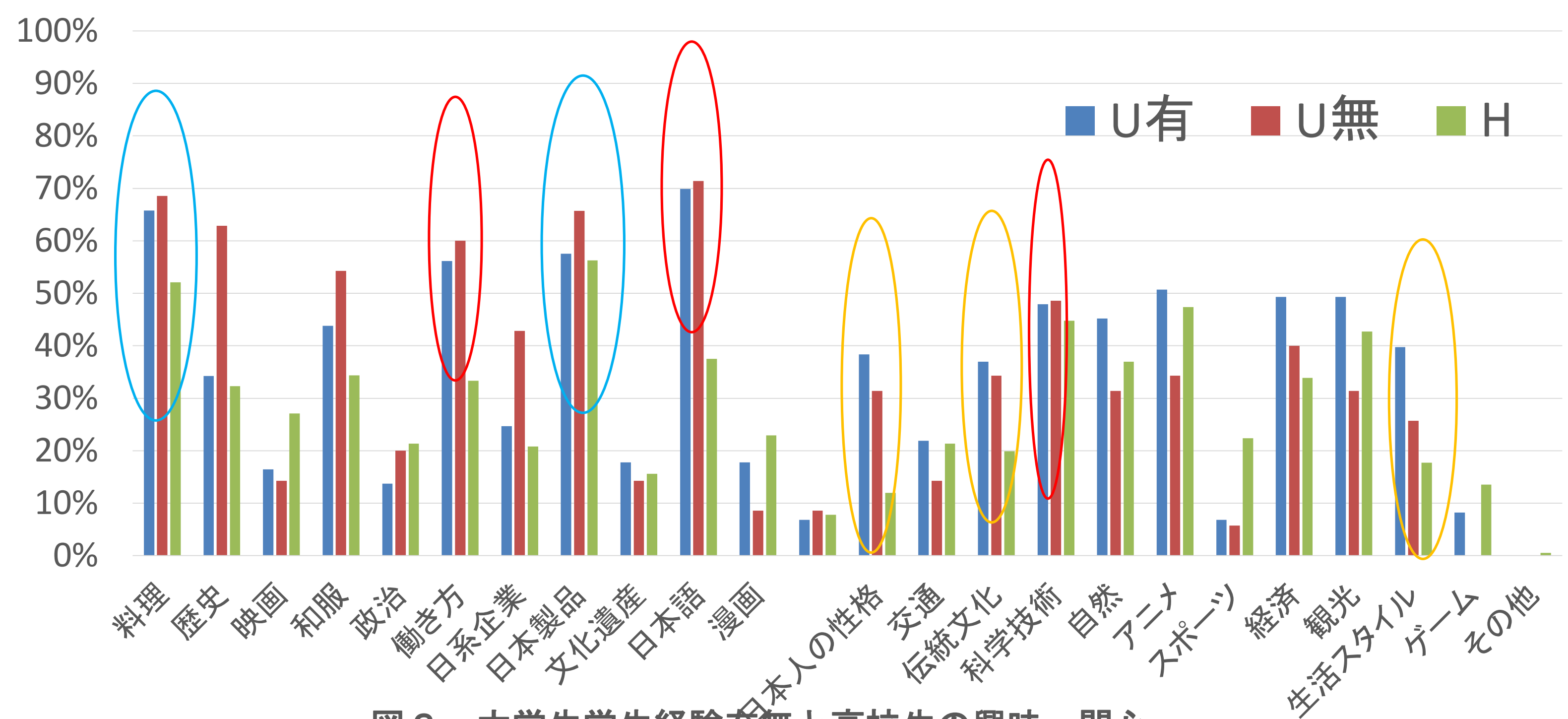


図2: 大学生学生経験有無と高校生の興味・関心 (該当するものを8つ選択)

(3) 日本人・日本語の印象: 表1に大高別に印象の高いもの五つを示す(赤字:異なる項目)。高校生は、いずれも「まったくイメージがない」を選択した者が30%前後あり、また選択数も少ない。具体的な印象を持っていないことが分かる。大学生の回答には50%を超える項目が9項目あり、学習経験により印象が具体化し、また変化も起きるようである。大学生で高い「漢字」や「助詞」は、カンボジア人にとって学習後、初めて得る知識だと言えるだろう。

(4) 中等教育における日本語教育の希望: 「もし、中等教育機関で日本語の科目があれば、勉強したかった・勉強したい」と、回答した者は、大学生が95.37%、高校生が85.94%、高校における日本語教育の導入を大多数が希望している。

5. まとめ

・学習経験により「日本への興味・関心」や「学習目的」が具体化することが示された。学習経験がない生徒のステレオタイプを自身の学習のための目的や関心に変えるために、シラバスに、今の日本社会や同年齢の人の実際の姿を情報として盛り込む必要がある。

・目的として将来の進路にかかわる項目が挙げられていた。留学や就職時に役に立つスキルやコミュニケーション能力を高めるためのタスク型活動を配置することが有効だろう。

・学習への意欲を維持するために、高校生が関心がある日本の「食文化」「科学技術」「アニメ・マンガ」等の話題を取り上げたい。